〔研究ノート〕

「田直画図記」印を追って

2024年1月に当館で開催した「やまと絵のこころ」展には、古絵巻の模写である「粉河寺縁起模本」（伝岡田為恭筆、個人蔵）が出陳されました。この模本の冒頭にはやや薄い黒色で「田直画図記」と読める印章が捺されています（挿図1）。この印を誰が使用していたか判明すれば、作品の伝来も明らかになるため展覧会後も気に掛けていました。この印に関する詳細について展覧会開催時には不明な点も多かったのですが、ここでは現段階でわかったことをまとめます。

「田直画図記」印は以前から指摘されていたように、国立国会図書館所蔵の「熊野新宮奉物」および「紀州高野山天野社什宝御影堂唐打敷模様」（以降、「唐打敷模様」と表記）という、紀州に関連する二つの資料にも捺されています。

このうち前者は巻子装の写本で、冒頭には例の印に加えて「東京図書館蔵」方印とそのわきに「明治十九年二月十八日購求」の日付印があります。ここからこの資料は1886年に図書館に収蔵されたとわかります。現在の国立国会図書館は当時東京図書館と呼ばれていました。

後者の「唐打敷模様」は一冊の写本で、「帝国図書館蔵」方印と、「大正7.3.14購求」と記す横長の楕円印が捺されています。したがってこの資料が当時の帝国図書館に収蔵された年は1918年のようです。「唐打敷模様」の請求記号「205-264」はNDC（日本十進分類法）が適用される以前の古い分類「函数+号数」にしたがっており、205は函、264は函内での受け入れ順を示しているようなので、念のため近い番号の資料も確認したところ、やはり大正7年の購求を示す楕円印が捺されていました。

図1

図２

図3

「唐打敷模様」については、明治45年1月（1912）から大正15年（1926）12月までに増加した和漢図書の書名をまとめたという『帝国図書館和漢図書書名目録　第四編』（1936-37年発行）に含まれており、この目録では「田能村直入写　写本」と記述されています。田能村直入（1814～1907）は江戸時代後期から明治期に活動していた画家です。図書館の目録には直入筆の模写として「唐打敷模様」が登録されているのです。

「唐打敷模様」は奥書にあたる部分に「右者紀伊国高野山天野社什宝／天保壬寅年十二月十五日燈下改之畢」とあることから、この写本の制作は1842年に完了したとわかります。ところが筆者に関する記述はないため、目録で直入による写本とされる根拠となったのは「田直画図記」印だったと推測されます。田能村姓の絵師たちは「田」に名や号を付けた自称をしばしば用いているので、「田直」を直入としてもそこまでおかしくはないように思われます。ただし、直入が「田直」と略す類いの印を用いた証拠は管見の限り見当たらないので今後も調査を続ける必要はあるでしょう。直入は18歳の時に師の田能村竹田（1777～1835）から、「癡」の名、「顧絶」の字、「小虎」の号を授けられました。そのため印章には「田癡之印」「田小虎印」などを用いていました。田能村姓の絵師たちのなかでは、直入の孫にあたる田能村小篁（1879～1910）が「田直之印」を用いていますが、「熊野新宮奉物」が図書館に入った1886年時点でまだ7才なので「田直画図記」印の使用者としては考えにくいでしょう。結局ほかに「田」と「直」が名前に入った適当な人物が見当たらないため、現段階ではひとまず「田直画図記」印は直入が使用したものと見ておきたいと思います。

すると浮上してくるのは先の図書館目録の記述通り「唐打敷模様」さらには「粉河寺縁起模本」を描いたのは直入なのか、という問題です。「田直画図記」印を有する資料のひとつである「唐打敷模様」は筆線、墨色、色調どれをとっても「粉河寺縁起模本」とは質が異なり、どちらかといえば拙い印象です。図書館では直入自筆と見なしたようですが、これも今後の検討が必要な部分でしょう。直入は竹田の遺品や中国絵画を数多く実見して模写していたことが知られており、模写の技術は相当高かったはずです。師の竹田は直入の模写について、「往々にして古画の神を伝へることがある」と語ったともいいます。そこで、「田直画図記」印を所蔵印と見なせば、模写の質の差や、絵画制作で多く用いた「田癡」や「田小虎」の呼称を用いない点も理解できます。

「粉河寺縁起模本」は従来から言われているように優れた筆致で写されているため、その筆者として岡田為恭（1823～64）を想定するのに無理はありません。為恭筆と見なす重要な根拠のひとつは箱の蓋裏にある「粉河寺縁起摹巻冷泉三郎筆也」の墨書です（挿図2）。墨書の下には、「號雙桐軒」「□画末洞」「□□處士」の三顆の印が捺してあります（挿図3）。この鑑定がいつ誰によるものかも残念ながら現段階では明らかではありませんが、今後の調査で伝来がより明確になればどのような人が目にしてきたのかも判明し、作品の意義もさらに増すことでしょう。

（仁方越洪輝）

主要参考文献
『幕末狩野派展』静岡県立美術館、2018年
『特別展　国宝粉河寺縁起と粉河寺の歴史』和歌山県立博物館、2020年
村田隆志「近代南画の巨星　田能村直入の生涯とその功業」『国際研究論叢』36（3）、2023年
近代書誌懇話会編『帝国図書館コレクション案内－請求記号から見た蔵書構成』近代出版研究所、2023年

季刊 美のたより No.230
令和７年 ４月 ４日
発行 大 和 文 華 館

Copyright © The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.